

「終わりの挨拶」

2022年12月02日

目を覚ましていなさい。信仰にしっかりと立ちなさい。雄々しく強くありなさい。何事も愛を持って行いなさい。（Ⅰコリント16：13～14）

私パウロが、自分の手で挨拶を記します。主を愛さない者は、呪われよ。主よ、来りませ。主イエスの恵みが、あなたがたと共にありますように。私の愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがたと一同と共にありますように。（Ⅰコリント16：21～24）

パウロは、コリント教会への手紙を書き終えるに当たり、最後の勧めと挨拶を書いている。勧めの言葉は、「①目を覚ましていなさい。②信仰にしっかりと立ちなさい。③雄々しく強くありなさい。④何事も愛を持って行いなさい」である。①、②、④は、目を覚まし、信仰に立って、愛に生きなさいという勧めだから納得できるが、③の「雄々しく強くありなさい」という言葉は、男らしさを評価する時代の産物であり、ジェンダー・フリーの現代では抵抗がある人がいるのではないか。

パウロは、Ⅱコリント書12章9節～10節で下記のように書いている。「ところが主は、『私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中で完全に現れるのだ』と言われました。だから、キリストの力が私に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、私は、弱さ、侮辱、困窮、迫害、行き詰まりの中にあっても、キリストのために喜んでいきます。なぜなら、私は、弱いときにこそ強いからです。」パウロの言う強さとは弱さの中でキリストの力が現れる強さである。この逆転こそが、信仰の神髄であろう。

そして「きょうだいたち、あなたがたにお願いします」と書いて、依頼ごとを書いている。ステファナの一家はアカイアで最初のクリスチャンになり、教会のために熱心に奉仕してくれた。あなたがたは、この人たちや、共に働き、労苦している人々に従いなさい。ステファナ、フォルトナト、アカイコがコリント教会にいることを嬉しく思う。彼らはあなたがたの足りない分を満たしてくれ、私とあなたがたとを安心させてくれた。このような忠実な信仰に生きる人たちを重んじてください。

エフェソをはじめ、アジアの諸教会があなたがたによろしくと言っている。アキラとブルスカは、どこにいても家の教会を開いてくれたが、彼ら夫婦と家の教会のメンバーが、主にあって心からよろしくと言っている。全てのきょうだいたちからよろしくと言っている。聖なる口づけをもって、互いに挨拶を交わしましょう。

「私パウロが、自分の手で挨拶を記します。」パウロは目が悪く、手紙を書けなかった。彼の手紙は同行していた弟子たちに口述筆記をさせて書いたものである。手紙の終わりに、自らペンを取って書いた。ガラテヤ書の終わりには、「御覧のとおり、私はこんな大きな字で、自分の手であなたがたに書いています（6：11）」と書いている。

「主を愛さない者は、呪われよ。」恐ろしい言葉であるが、パウロの激情であろうか。

「主よ、来りませ。」主イエスの再臨を待ち望む終末信仰である。この信仰が、パウロをあれほど過激な宣教に突き動かしたのである。「主イエスの恵みが、あなたがたと共にありますように。」祝福を祈る祝祷の言葉である。「私の愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがたと一同と共にありますように。」パウロの愛が、キリストを通して、共にあるようにと祈っている。パウロはコリント教会には悩まされてきたが、互いを結び付ける愛があることを信じていた。信仰は拒絶ではなく、共にあることを喜ぶのである。